9 月 4 日のメッセージ

聖書：使徒言行録　13：　44 – 52

「神の言葉は、まずあなたがたに」

私たちが脱ぎたくても脱ぐことができない「古い人」。その中で最たるものは、「既得権」ではないでしょうか。むしろ、「もっと地上での成功がほしい」と積極的に着たいと思っているかもしれません。

ある時、イエスはこんなたとえ話を語られました。「ある人がぶどう園を作り、……」(「垣を巡らし、搾り場を掘り、見張りのやぐらを立て、これを農夫たちに貸して旅に出た。」マルコによる福音書 12:1)。

神とイスラエルとの関係をぶどう畑に譬えることは、旧約聖書では当たり前のことです(「イスラエルの家は万軍の主のぶどう畑／主が楽しんで植えられたのはユダの人々。」イザヤ書 5:7)。だから、この話が始まった時点で、すでに何か嫌な予感があった者もいたことでしょう。なぜなら、イエスの前にいるのは、聖書に通じた祭司、律法学者、長老たちだったからです(「……イエスが神殿の境内を歩いておられると、祭司長、律法学者、長老たちがやって来て、」マルコによる福音書 11:27)。そして、彼らのその(良くない)期待通り、イエスの話は既得権者が、自分だけの利益を守ろうとして正しくない行いをすると続いていきます(「農夫たちは話し合った。『これは跡取りだ。さあ、殺してしまおう。そうすれば、相続財産は我々のものになる。』」マルコによる福音書 12:7)。既得権者が救いを独占しようとするならば、救いの本質から外れてしまうことを、イエスははっきりと宣言されるのです(「さて、このぶどう園の主人は、どうするだろうか。戻って来て農夫たちを殺し、ぶどう園をほかの人たちに与えるにちがいない。」マルコによる福音書 12:9)。今、期待されるべきは自分を律し、裁くことであるはずなのに、実際には既得権を守るための争いばかりが起こっているのだから、それは当然のことだ、と(「主は裁き(ミシュパト)を待っておられたのに／見よ、流血(ミスパハ)。正義(ツェダカ)を待っておられたのに／見よ、叫喚(ツェアカ)。」イザヤ書 5:7)。

既得権者との戦いは、イエスの十字架と復活を経験してもなお継続されます。パウロとバルナバがアンティオキアの会堂でイエスのことを、キリストの福音を語ったとき、熱心に聞き入ったのは主として異邦人たちでした。彼らは真の救いを求めて、子どものようにまっすぐに二人の話を聞いたのです(「パウロとバルナバが会堂を出るとき、人々は次の安息日にも同じことを話してくれるようにと頼んだ。」使徒言行録 13:42)。ところが、「自分たちはすでに救われているから大丈夫」とうそぶくユダヤ人(=既得権者)は、真の救いから目をそらします(「しかし、ユダヤ人はこの群衆を見てひどくねたみ、口汚くののしって、パウロの話すことに反対した。」使徒言行録 13:45)。

パウロは、そのような彼らに向かってなお呼びかけます。「神の言葉は、まずあなたがたに語られるはずでした。」(使徒言行録 13:46)と。厳しい言葉が続きます(「だがあなたがたはそれを拒み、自分自身を永遠の命を得るに値しない者にしている。見なさい、わたしたちは異邦人の方に行く。」使徒言行録 13:46≒マルコによる福音書 12:9)が、それは「まだ間に合う」との呼びかけです。「異を唱えるあなたたちも含めて、全ての者が神の救いの内にある」ことをパウロは確信しています。だから、人々を扇動し、自分たちに害をなそうとする彼ら(「ところが、ユダヤ人は、神をあがめる貴婦人たちや町のおもだった人々を扇動して、パウロとバルナバを迫害させ……」使徒言行録 13:50)にも呼びかけるのです。不安の中でもなお、神に信頼し、回心を呼びかけるのです(「大いなる集会で正しく良い知らせを伝え／決して唇を閉じません。主よ、あなたはそれをご存じです。」詩編 40:10)。

すでにその呼びかけは私たちの耳にも届いているはずです。応えるのか、ためらうのか。はたまた既得権に胡座を掻いて「古い人」を着続けるのか。

今、私たち自身が問われています。